町民文芸

只見短歌会　令和五年五月詠草

施設より帰りて眺む山の家我を待つがに福寿草盛り　馬場　八智

新学期少数なれど小学生元気可愛さ心和みぬ　関谷登美子

春たけなわ草勢ひて花々の混じりて心満ちて癒さる　目黒　富子

初節句迎へし息子に袴着せ短き手足に余る袖裾　立花　奏音

老い母の納骨済みても仏壇を訪れくるる人の多しも　新国由紀子

「また来てね」「今度またね」と手を振りて別れて来しが訃報の届く　渡部ヨリ子

漬物が美味しと言へば夜遅く娘が野菜を刻む音する　故　新国　洋子（遺　作）

只見俳句会　五月定例会

日高俊平太　指導

一本の蕨小薮に伸びいたり
しつらいし点前畳や緑さす　礼

やっと春戸を開け放ち風よ来い
村はずれ桜一本満開に　修　一

春光や欠伸のうつる子らの列
春風や屋根見下ろして丘に立つ　紺　青

汗拭い拉麺食らう屋台かな
夏浅し清張訪ねて小倉かな　信

ものの芽や年々減るわ植木鉢
青空よ初蟬の声届いたか　恒　夫

新生活地図を頼りの親放れ
晴れあがり空のまぶしさ青柳　都

朝朗土手の桜の色づきぬ
山頂に群れ登るごと櫛若葉　真理子